家庭否定論

家庭とは何か

ねえ皆さん。

わたし達が、かりに今、嘉悦孝子とか、山脇房子女史たちをお訪ねして、「家庭とは何ぞや」と、お訊きして見るとすれば、そのお答えは、たいていきまっていますね。いわく「家庭とは神聖な場所のことだ。それへの奉仕者としてのみ、婦人の生活はあるのだ」どうでしょう。この答えに、わたし達、満足ができましょうか。

家庭とは豚小屋のことだ

家庭とは家の庭と書きます。

まず家という字――古い書物によりますと、この家という字は、豕（豚）の上に屋根のかぶさった字、すなわち豚小屋という意味の字であると書いてある。

ねえ皆さん。

神聖なるべき「家」が、「豚小屋」を意味するなんて、少しおかしいですね。で、これについて、多くの学者が、種々の説を立てている。

ある人はこう言っている。「豚は支那人の常食だから、豚のいる所すなわち人のいる所だという理由から、転じて人の住居を家というようになったのだ」と。だがこの説はあやしい。

他の学者は「家とは私有財産のことだ」と言っている。昔、支那人の主な財産は豚であった。彼等はそれを初めは共有していたが、権力者の出現と共に、私有が始まり、従ってめいめいが屋根囲いの厳重な小屋を建てて、それらの豚どもを入れて置くようになった。それが家の起こりだ。だから家とは、豚とか、その他のすべての私有財産を、入れて置く建物のことだと言うのです。

私有財産としての妻子その他

家財という言葉がある。この言葉は、普通の意味では、家具に同じい。然しながら、少し立ち入って研究して見ると、「自分の所有物の意。即ち妻子財産等を言う」とある。

ねえ皆さん。

よくここで注意して下さい。家財とは「自分」の所有物の意である。家（カ）というこ

とが、ここでは自分（又は個人）という意味をもっている。例えば家言（カゲン）ということが、一個人的言説という意味であるのなども、その一例である。かくの如く、家（カ）は自分であるから、家財（カザイ）は即ち自分の所有物という意味になります。

さてまた、その「自分の所有物」なるものは、「即ち妻子財産を言う」とあるから、その場合の「自分」なる人間は、いうまでもなく妻子財産を有する「男」である。「男」のみが、「家（カ）」として立つことが出来るし、「婦人や子供」は「家財（カザイ）」でしかない。

家庭における男

右にいったことで、家というものは私有財産を入れて置く建物であり、また、他面、その所有者の存在を意味するものであるが分りました。

早くいえば、一人前の男は家という私有財産をもっていなければならない。それをもっていることによってのみ一人前であるか無いかが決定される。

朝鮮などでは独身の男はチョンガーとか言って軽蔑される。印度でも家をもたない男は男として認めないという風があるとききますが、もちろん、この風は、日本にもある。

それは単なる「独身」を軽蔑するのではなく、「私有財産」の無いことを軽蔑するのである。

妻子を私有財産として所有しているということは、男にとっての非常な誇りである。されば、男は、ともすれば、妻子を私有財産的に取り扱いたがる。わが国などにも、こんな男が沢山いる。文士とか、主義者とかの男どもの中にも、かなりこんな男がいる。

家庭の庭の字その他

家庭の庭の字をしらべて見ると、「庭は庁と同義なり」とある。庁というのは、「政治を行う場所」であり、「罪人を検挙し罪状を取り調べる役所」である。

いったい政治、法律等の起源をたずねると、「罪あって然る後政治あり法律あり」である。即ち政治や法律は、罪人がなくては成り立たぬ。モーゼの法律なども、罪人のために出来たもので、人間を罪人であると考える時に、始めてすべての法律には意義がある。

死んだ高畠素之は、性悪説の主張者で、従って国家主義者だった。この点、彼は正直であり、徹底していた。人間を罪の子と見、悪人と見る見方の上にのみ、法律や政治、即ち国家は、自己の存在を正当化して主張することが出来る。

ところが、わが国の古典学者本居宣長は、すべての法律や政治を否定している。彼は、「人間は罪の子ではない」という見方の上に立っている。「人間を自然のままに生かしたならば、人間は大した罪などはおかさない。人間は明るい正しい道を、生まれながらに知っているから」と彼はいっている。

では、法律や政治は、何のために人間を罪人であるとしなければならないのか。「それは法律や政治」自身が罪人のものだからだ。「つまり、※少数の罪人（物や人を財産として私有しようとしたり奴隷として虐使しようというような欲望を起こした少数の罪人）が、自己の欲望を遂げようとすると、そこには種々の反逆が起こる。それを彼等は罪悪と称し、それらの反逆人を罪人と見なして、そこで法律を作ったり、政治を行ったりするのである。だから、政治や法律こそ罪悪そのものであるし、それは少数の罪人によって作られたものである」と宣長は言っている。

家庭の庭の字は庁と同じ意味の字、さてまた、その庁の字は「政治を行う場所」であり、「罪人を検挙し罪状を取り調べる役所」である意味の字である。

そうすれば、家庭の庭の字は、私有財産として取り扱われている妻や子（即ち家族）を罪人と見なし、故にそれを取りおさえ、取り締まるための役所である意味の字である。

家法とか、家憲とか、家道とかの文字は、すべて、家庭の庭、即ち家庭における罪人どもを取り調べ、取り締まる役所から発布される、法律であることを意味している。

※性悪説では罪人という意味は、普通絶対的のものとされるが、性善説では相対的——例えば錯誤とか誤謬とか変態とか狂乱とかの意味に解される。即ちここでいう少数の罪人の如きも、人類のある期間における変態的、偏奇的の状態の先端にある者を意味し、それらの者がその状態を維持せんが為めに錯誤的の制度を打ち建てるのやむなき

に至ったことを意味する。なお、何故にそうした変態的の状態が生じたかについては、追々書いてみることにします。

家庭をケトバセ

ねえ皆さん。

文字から見た家庭は、大がいこういったもので、決して神聖な場所どころか、罪悪の巣窟であり、刑務所であるのです。

「文字は一切の哲理だ」と言い、「ことばは神なり」というが、全く、文字に現われた家庭の真相は、神のように正直で、実際的である。

もっとも、人間の住むところ、そこには常に、相互本能の変形としての、何らかの情緒がある。封建時代の君臣の間には、君臣的の情緒があり、君は臣に対して慈、臣は君に対して忠でありました。そのように、家庭にも「家庭情緒」があり、家主は家族に対して慈、家族は家主に対して忠であるべきだとされる。

だが、わたし達が、例えばお芝居や小説や、たまに実際のそうした君臣の情や、家庭間の愛を見て、「美しい」と感じるのは、慈だとか、忠だとかの階級的道徳に対してではなく、その道徳の仮面の下から曲りなりに現われる「相互扶助本能」すなわち階級を超え、法律を絶した原始的平等の相互愛の姿に対してである。

ところがある人々は、それをそうは見ないで、仮面そのものを見て直ちに君臣讃美、家庭讃美に走ることがある。だが、その実そうした仮面は、真情を妨げることにのみ役立つものでしかない。

その証拠には、芝居や小説にあるような君臣の情や、家庭の愛は、実際には、ごく稀れであって、ある婦人雑誌が、知名の文士達に、「家庭に関する正直な感想」をもとめたところが、その九分七厘まで、「結婚は墓場、家庭は牢獄だ」と答えているが、そのまた妻君達は、別の雑誌で、それらの文士たちが家庭にあって、いかに冷酷で、野蛮人で、人非人であるかを暴露している。

とにかく、多くの家庭がうまくいっていないことは事実で、徳川時代に書かれた『庭訓』とか、『女鑑』とかいう書物を読むと、「女は邪険で、陰悪で、姦キツだ」と毒づいてある。古くからの家庭で、女がいかにもてあまされていたかが分る。つまり女の「人間性」が、家庭というものと、いかに衝突してきたか。

これまでの家庭主義者は、「女よ家庭に従順であれ。そうしてこそ家庭悪はなくなるのだ」といってきたが、なくなるどころか、いつまで経っても、かえって多くなるばかり。そこで目ざめた婦人は、「家庭をケトバス」ことが唯一の最上の手段であることを知った。

家庭とは何か。元来それは豚小屋と刑務所を意味しているではないか。

現在をいかにすべきか

家庭をケトバスといっても、いますぐ、完全には、そうすることは出来ない。例えばわたし達は現在のこの社会をもケトバシたいのだが、いますぐには、それも出来ないのと同様に。

では、どうしたらいいか、それはわけはない。第一にはまず意識の上でケトバスことだ。第二には家庭外の職業に目ざめることだ。わが国の職業婦人（労働婦人）が、職業を嫁入り前の一時的の仕事であるとしている間は、家庭は決してケトバセない。第三には自己の（夫のではない）生活力に確信がない限り、子供はなるべく生まぬようにすることだ。第四にはたとえ精神的にだけでも、いつ何処へ投げ出されても平気でいられる、つまりよくいえば大悟徹底の域、わるくいえば多少すれている域にあることを必要とする。

これだけの条件を具備していれば、その婦人は、もはや、現在の社会においては、最大限の程度に、家庭をケトバスことが出来る。たとえ形の上では家庭らしいものを営んでいるにしても、その実質においては、ゆうゆうと、ケトバシて生きていられる。

そして、そうした婦人の営む男女生活は、かえって、非常に純であることが多い。もっともこの純の意味は、従来のような意味でのそれではない。淫売的の行為の中にもそれはあるし、いわゆる多夫多妻の関係の中にもある。また、よそめには少し因循だと思われるくらいな平和ないわゆる一夫一妻の関係の中にもある。ただ、その何れもが、実質的に家

庭をケトバシており、従って、きわめて原始的な相互愛の真諦に触れていることによってのみ、それは即ち純なのである。

ねえ皆さん。

わたし達に、家庭のことで少しでもほんとうなことが正直に言えない、という点があれば、それはわたし達が、まだ家庭を、ほんとうにはケトバシきれないであるからだとは思いませんか。

婦人が、家庭のことを、はっきりと、正直に、口にすることが、できるようになれば、それだけでも、彼女は偉大な進歩をしたことになります。

かって、わが国の自然主義文士たちは、自分の妻の醜い一面を、盛んに小説に書きました。田山花袋は『フトン』で、徳田秋声は『カビ』で、いずれも、家庭の暗さを、妻のせいにしているのです。

ところが、婦人の文士たちは、喧嘩わかれでもしない限り、家庭のことには、故意に触れないようにしている。そこには明らかに家庭婦人の臆病がある。

男の文士たちの「横暴」な態度は、憎んでも余りあるが、女の文士たちの「卑屈」な態度も、気もちのいいものではない。

わたし達は、横暴でも、卑屈でもなしに、ひたすら正直に、避けることなく、それらのことを口にする勇気をもちたい。が、それは非常にむずかしいことです。なぜなら、その

前に、ちゃんと家庭を、わたしがさきに言ったような意味でのケトバシ方で、ケトバシて置かなければ、そうした勇気は、決して出てこないであろうからです。